

# 特別抜粋版

## ひとりっ子、 12歳で 寮に入る

文・いそのなほこ  
絵・山口正児



書籍で全編をお読みにになりたい方は 無料→



# ひとりっ子、 12歳で寮に入る

## 第3回

# 独り立ち

小学校を卒業し、あと数週間後には、いよいよ中学生となる。

それも、ただの中学生ではない。

住み慣れた家を離れて生活する、自立した中学生だ。

全寮制の中学校へ進学することを、最後まで反対していた父も、

私の粘り強い説得の末、とうとう許してくれた。

私が、お小遣いを貯めた預金通帳を渡し、

自分で学費を出すから行かせてくれ、と言ったのが功を奏したようだ。

もったも、一か月分の学費にも満たない額の貯金だったのだが。



寮に入るということで、いろいろと準備をする必要があった。

とはいっても、ほとんど母が一人で、必要な学用品や生活用品を買いそろえていた。

私は、忙しそうにしている母を見て、ご苦労なことだ、などと他人事のように思っていた。寮に入れば、洗濯だって自分でしなくてはならない。

私は、母に洗濯の仕方を見せてもらった。洗濯機の回し方に干し方、たたみ方。

いちいちダメ出しをされ、いやな気分になった。

でも、あと少しの辛抱だ。

私は、女子寮で、気の合う友人たちと共に寝起きし語り合う、のびのびとした自分の姿を想像し、ぐつと堪えた。

寮に入る数日前には、父が突然、私をおもちゃ屋に連れて行き、

「気に入ったぬいぐるみを選びなさい」と言った。

私はそれまで、ぬいぐるみを一つとして持っていなかった。

母が、私のアレルギー体質にぬいぐるみは良くないと言って、買ってくれなかったからだ。

私は戸惑いながらも、小さなアヒルのぬいぐるみを手に取った。

すると、父が、「小さすぎるな。もう少し大きい方がいい」と言っ

それより一回り大きいものを、胸に抱きしめた。

そして、「これならいいだろう」と言った。

その時に、やっと気がついた。

父は、私が寂しくなったときに抱きしめるものを

与えてくれようとしているのだ。

父の氣遣いに感謝しながらも、

寂しくてぬいぐるみを抱きしめる自分の姿を、

どうにも想像できないでいた。

何から何まで世話をされていたひとりっ子が、

親元を離れることに少しも不安を感じていなかった。

多分、自分で自分の世話をしたことがなかったため、

その大変さが想像できなかったのだ。

今考えると、能天気なものだった。〈続く〉



発行社 福音社

企画 学校法人三育学院

〒298-0297 千葉県夷隅郡大多喜町久我原1500